

「自然づくり・環境づくり・人づくり」サマーチャレンジ 2018

川ある〜き調査隊 実績報告書

期日 2018年8月4日(土) 9:00~12:00
場所 日川 (ぶどう橋周辺)
気温 28℃
水温 20℃
隊長 田辺 篤 市長
講師 長田 義己 氏 (山梨動物生態研究会)
北村 眞一 氏 (山梨大学教授地域未来創造センター長)
参加者 児童 32名 保護者 20名 スタッフ 52名 計 104名



1. 水質調査

1-1 調査方法

パックテスト(簡易水質調査キット)による調査方法を用いる。もっとも簡単な水質測定器であり、多くのパックテストの反応原理は JIS K0102 などの各種公定法内の吸光度法を応用している。

1-2 用語説明

化学的酸素消費量(COD)

海水や河川の有機汚濁物質等による汚れの度合いを表す数値で、水中に有機物などの物質がどこまで含まれるかを、過マンガン酸カリウムなど酸化剤の消費量を酸素の量に換算して示される。CODの数値が高いほど水中の汚染物質の量も多いという事を示す。

魚が生息できる河川の水のCODは 5 mg/l以下とされる。

COD値 (mg/l)	0	1以下	2~5	5~10	10以上
汚染の目安	きれいな水	きれいな溪流	汚染がある	汚染が多い	汚れた水

1-3 調査結果

パックテストの結果、COD値は 1.0 mg/l、透明度 100cmで、日川は良好な水質であることが分かった。イベント一週間前の台風の影響で川の藻も流され、目視で川底が確認できる程だった。

2. 生物調査

2-1 調査方法

ガサガサによる捕獲を行う。

(ガサガサとは、生物がいそうな場所の下流側にタモ網を川岸に垂直になるように置き、上流側から足でガサガサと魚をタモ網へ追い込む方法のことである。)



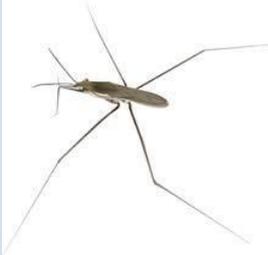
2-2 調査結果

14種類 460匹の生物を捕獲することができた。山の生き物や川の生き物が混在している環境であり、多様な生物が棲む、きれいな水といえる。

日川で捕獲した生物

名前	数(匹)	写真	コメント
ヒゲナガカワトビケラ	45		流れの速い早瀬の礫や小石の間に固着巣を作り、糸で巣をはって生活する。
カジカ	47 (MAX8 cm)		きれいな川にしか住めない。ふるさとの溪流を代表する魚。種類によっては絶滅危惧種あり。
アブラハヤ	160 (MAX8 cm)		地区によって名前の違う。触ったときにぬるぬるするのでアブラハヤと呼ばれる。
コオニヤンマのヤゴ	23		天敵から身を守るために、落ち葉に扮した見たい目をしている。
コヤマトンボのヤゴ	36		楕円形で平べったく、脚が長い。丘陵地や低山地の河川で見られる。

ヘビトンボ	3		清冽な水質の指標生物の一つ。強い肉食性で、この幼虫が一匹いると周囲から他の昆虫がいなくなると言われている。
ナベブタムシ	90		河川清流域の川底の細礫の中に潜っている。容存酸素量の多い平瀬に多く生息する。
ミヤマカワトンボのヤゴ	2		成虫であるトンボの形に近く、おなかの先っぽにはうすくて長い3本の尾がある。
サナエトンボのヤゴ	20		扁平で紡錘形に近い形で、足はあまり長くない。あまり活発に泳ぐようなものではなく、多くは水底の泥や砂に潜る。
オニヤンマ	5 (成虫)		国内最大のトンボとして知られる。水のきれいな川の周辺や森林など、日陰の多い涼しい場所を好む。
カワニナ	2		農薬や合成洗剤などが流れ込んでいないこと、溶存酸素量が多いことなどの条件で生息可能。
カワヨシノボリ	15		日本の固有種。水のきれいな、流れのある淵から平瀬にかけての木の根や水草の陰、川底の石周りなどに多い。

オタマジャクシ	2		<p>雑食性のものが多く、親よりもはるかに腸が長い。骨格のほとんどが軟骨であるが、成長に従って硬化する。</p>
アメンボ	10		<p>足先の毛だけを水面につけて、表面張力を利用して水面に浮かぶ。肉食で、針のような口器を突き刺して獲物の体液を吸う。</p>

1. まとめ

日川は多様な生物が生息する川であり、甲州市の大切な財産であることが再認識できた。

また、休憩時間には株式会社メイキョーさんによる水の勉強会を行い、普段何気なく使っている水がどのような仕組みで私たちのもとへ届いているのか、日川の水はどのくらいきれいなのかを、水の大切さとともに学んできた。

気温が40℃に迫るほどの猛暑が連日続き、熱中症など子どもたちの体調を考慮し急遽活動スケジュールを変更し行ったため、ケガや事故もなくイベントを終えることができた。

普段はあまりできない川遊びを体験した子ども達には笑顔が溢れ、また、川の楽しさと共に危険性も学びながら、将来に残すべき資源を肌で感じてくれていた。

